

1. 読解力を高めよう

1 読書のすすめ

〔1〕ウサギとミッフィー

「ウサギ」の写真と「ミッフィー」（ブルーナーの絵本）の絵があります。1歳前後の子どもはどちらにより強く反応するでしょうか？

答えは「ミッフィー」です。何故だかわかりますか？ 幼い子は情報処理に時間がかかります。だから、太線で輪廓を強調する「ミッフィー」は理解できても、点描という情報量の多い写真には対応しきれないのです。

読書とは、情報を処理することです。自分のレベルに見合った読書をするので、まずは読書の楽しみと習慣を身につけましょう。

〔2〕読書と負荷

ところで、自分の能力に一番見合っているのは漫画だというアナタ。50 過ぎても通勤電車で漫画を読むことになりますよ。運動能力も同じですが、ある程度負荷のかかったトレーニングをしないと、レベルアップは望めません。読書も同じことです。

負荷のかかる読書とは、居ずまいを正さないと理解できない書や、精読しても理解できず、何年か経った後にハタと膝を打つような書を読むことです。軽いものから重いものまで、バランス良く読みましょう。

〔3〕読み方の種類

読書の仕方にもいろいろ種類があり、呼び方も多種多様です。幾つかの本からその名称を拾ってみましょう^{注1)}。

- ・ **インテンシブ・リーディング** (intensive reading 精読) …… 学術書などの深い内容理解が求められる時に、1 頁ずつ丁寧に読んでいく方法。
- ・ **エクステンシブ・リーディング** (extensive reading 多読) …… たくさん本を読むことで、読書の楽しみや、習慣を身につける方法。

注1)

早坂慶子「大学生のための読解」北尾謙治他『広げる知の世界—大学でのまなびのレッスン—』(ひつじ書房 2005/5 第5章)
*この本は、学生向けに書かれた「読解力」の解説本としては最も参考になる本でしたので、紹介しておきます。

佐藤望他『アカデミック・スキルズ』(慶應義塾大学出版会 2006/10、第4章クリティカルリーディングの手法)

*この本も、学問を始める上での様々なスキル——ノートのとおり方から、レポートの作成までがコンパクトにまとめられていて、参考になります。

- ・スキミング (skimming 大意把握読み) ……全体をぱらぱらめくりながら速読し、大まかな内容をつかむ方法。
- ・スキヤニング (scanning 情報検索読み) ……必要な情報だけに絞って探し、その箇所だけを読む方法。
- ・クリティカル・リーディング (critical reading 批判的読解) ……精読を通して正確に理解した上で、命題を論理的に再検証する方法。論文・レポート作成のための読書法。
- ・アカデミック・リーディング (academic reading) ……論文・レポートを書くために必要な読み方。クリティカル・リーディングに同じ。
- ・シントピカル・リーディング (syntopical reading) ……同一テーマによる複数冊の書を読むことで、相違点を明らかにする方法。

M. J. ウォレス著、萬戸克憲訳『スタディー・スキルズ』(大修館 991/02)
*これは、欧米に留学する学生向けに書かれた本です。大学で学ぶためのスキルが、丁寧に書かれていますが、例文は英語です。

MJ.アドラー他、外山滋比古他訳『本を読む本』(講談社学術文庫 1997/10 第4部シントピカル読書)
*読書術としては、草分け的な書なのかもしれませんが、いささか冗長です。気の長い方は、どうぞ。

ほかにも、下読み、速読、素読、通読、濫読、などという言い回しもありますね。これらの名称は、厳密には個別の読書法をさしているわけではなく、少しずつニュアンスと守備範囲を変えながらも重なる部分が多くあります。既に皆さんも無意識のうちに体験してきた読書法も多いのではないのでしょうか。

どういう読み方がよいかではなく、目的に合わせた読書法を、その都度選んでいくというのが理想的です。

2 本の読み方

〔1〕一般書の読み方

紹介した多岐にわたる読書法を、ここでは、大きく二つ——「学術的な本」と「それ以外の本」と——に分けて、もう少し詳しくお話ししましょう。

まず、「学術書以外」の読書についてです。これは、小説やエッセー、新聞や雑誌など努力なしに楽しめる書物ですから、ただひたすら多読すればよいのですが、中には読書自体が嫌いな人もいるでしょうから、一言、好きになる方法を添えておきます。

齋藤孝さんが2冊の本を書いています^{注2)}。一冊は小学生に向けて書いた『頭がよくなる必殺！読書術』、もう一冊が大学生向けの『読書力』です。小学校の先生を目指している方や、読書そのものが嫌いな方には『頭

注2)
齋藤孝『頭がよくなる必殺！読書術』(PHP 研究所 2004/08、10～40頁)

齋藤孝『読書力』(岩波新書 2002/09、7～48頁)

がよくなる……』をお薦めします。1 時間もあれば読み終える程度の分量ですし、『読書力』のエッセンスが詰まっていますから、図書館でめくってみるのも手ですね。

斎藤氏はその本の中で、読書好きになるポイントとして、

- ・ 先ず 10 冊読み通すこと、
- ・ 読むスピードを上げること、
- ・ つまらないときはどんどん飛ばすこと、
- ・ 自分の本棚をつくって辿った道を可視化すること、
- ・ 読了の達成感を知ること、
- ・ 面白い本を見つけたら、同じ著者、同じ系統の本を探すこと、
- ・ 書店で本を買うときは、最低でも 5 冊から 10 冊チラ読みすること

などを提言しています。箇条書きにしてみると当たり前のようですが、実際に目を通してみるとなかなか説得力があります。特に、書店を散歩コースに入れて、一冊見て「これ」と決める前に、近くの本も手にとって、パラパラめくり、何頁か読んでみる、「これは、いける」と思ったら候補、逆に 1 頁でも「う～ん」ならお別れという本の選び方は、ハズレをなくす有効な方法ですね。読書感想文の書き方などもユニークでした。

ただし、これ等の提言は本の嫌いな小学生向けの話。大学生には、「読書力」をつける目安として「文庫 100 冊・新書 50 冊」の読破を課しています。本は人によって負荷のかかり方が違います。児童文学は「離乳食」、推理小説・ライトノベル・雑誌などは「乳歯の食」として対象から外していますから、4 年間で読む量としてはまずまずですね。特に、新書・学術文庫・教養文庫などは、専門的な学問への入門書として生まれた経緯がありますから、これを 50 冊読破する学生さんが増えるのは大歓迎です。教養の高い学生さんが増えると、集団そのものの話題もレベルアップします。読書を食事のように楽しむキャンパスになって欲しいものです。

【2】学術書の読み方

学術書を読む場合は、一般書と違ってさらさらと読み進めることができない場合が多いでしょう。その場合には読み方を変える必要があります。それには、全体的な理解を優先した「下読み」作業をおこない、その後で精読することです。

(1) 下読み作業は羅針盤の入手だ

難解な書物を読む場合は、いきなり本文に入らないで、とりあえず外側から眺めてみましょう。著者の経歴をみれば、その人がどういうことを専門にしているか、どんな著書を書き、何を語っているかがわかります。前書きや後書きにも目を通しましょう。本を執筆した意図や、その本に対する他者の評価もあります。

同じように目次にも注意を払います。全体的な本の流れがわかるので、ここで鳥瞰図を入手しておきます。それから、パラパラ何頁かを拾い読みしたり、時にはザッと通読したりという「スキミング」をおこないます。

大雑把に全体像をつかむこと、それが目標です。いわば、最終目的地を見据えて行程表をつくり、これから精読していくときに、自分がどこを読み進んでいるのか、常に明確になるようにしておくこと、これが難解な文章を読むときの、理解の助けとなるのです。

(2) 通読作業は完結と速さだ

学術的な書であっても、それが入門的なもの、例えば新書や学術文庫などの場合は精読するまでもなく理解できるかも知れません。その際には、読み終えることと速さを保つことに注意を払ってください。「**レポートを作成してみよう—実践編—**」(「**リエゾンゼミ・ナビ『学びとの出会い』**」第3章9節、3「**本の読み方**」)でも立花隆さんや梅棹忠夫さんの読書法を紹介しておきましたので、参照してください。

(3) 精読とは要約をつくること

精読するとは要約をつくることだと考えてください。要約は段落→節→章→全体へとまとめていきます。1段落に1つ、トピック・センテンス(段落の要旨にあたる文)があります。各段落のトピック・センテンスをまとめれば、節の要旨になります。節の要旨をまとめると、章の要旨となり、それをまとめたものが本全体の要約となります。

要約をする際のヒントとして、齋藤孝さんの『読書力』を引用しておきます。

私は自分が線を引くときには、三色ボールペンで色分けして引いている。青と赤が客観的な要約で、緑が主観的に「おもしろい」と思ったところだ。青は、「まあ大事」という程度のところに引き、

赤は、本の主旨からして「すごく大事」だと考えるところに引く。赤だけ辿れば、本の基本的な要旨は取れるように引く。(略) 赤をいきなり引こうとすると、緊張してなかなか引きにくいので、青を引きながらおよその要旨やあらすじをつかんでいく。そして、その中から最重要のものを見つけるという順序でやる(赤を引く)と効率はいい。

齋藤孝『読書力』(岩波新書 2002/09、140 頁)

本の要約とは関係なく、自分が面白いと思ったところに引いた線は、一生使える金言が多いものです。要約のための傍線は本の理解には役立ちますが、大半がその時限りなのに対して、「ほほう」と思った傍線部は人生の所々で役立ちます。詳しくは「**講義ノートをつくろう**」(「**リエゾンゼミ・ナビ『学びとの出会い』第3章5節、1-1「人生を変えるメモ**」)を参照してください。なお、私は2色のマーカーを使います。「本の要旨」と「ほほう」です。要約に自信のある方は、2色で良いでしょう。

(4) あなたは、忘れるために本を読むのか

大江健三郎さんは13歳からずっと、読書ノートをつけているそうです。そのきっかけを次のように回想しています。

カードをつける習慣は子供のころできた。生まれ育った四国の村に図書館はなく、公民館に村の人が寄付した本が集められていた。1年間、ほぼ毎日通いそこの本は全部読んだ。家に帰り「お母さん、ぼくは公民館の本をぜんぶ読んだ」と言ったところ公民館に連れていかれた。

適当に取り出した1冊の最初のページを母が読み、あとを続けるよう促された。「最初の1冊はたまたま覚えていたが、その次、わからない。はい次、わからない。すると、あなたは何のために本を読むのか、忘れるために読むのかと言われた」

これはいけないと思って、カードをつけるようになった。1冊読むと、自分がどう思ったかを記し、大切な行を抜き書きする。13歳から今も続く習慣だ。

「読むワザ」(『朝日新聞』2010/01/01 第4部)

(5) 梅棹式「読書ノート」

大江健三郎さんのノートと、ちょっとニュアンスの違うのが梅棹忠夫さんの考え方です。

わたしの場合、ふりかえってみると、本に線をいれる個所にはあきらかにふたつの系列がある、ということである。第一の系列は、「だいじなところ」であり、第二の系列は、「おもしろいところ」である。

「だいじなところ」というのは、その本を理解するうえで、カギになるようなところか、あるいは、著者のかんがえがはっきりあらわれているところなどである。

ところが、じっさいには、その書物の本筋とはほとんど関係ないような、場合によっては著者が気がつかずにかいているようなことがらで、ひじょうにおもしろくおもって、傍線をいれている場合がすくなくないのである。これが、「おもしろいところ」であって、そのおもしろさはまさに、「わたしにとって」のおもしろさである。

ところでだいじなことは、読書ノートの内容である。よみおわって、読書ノートとして何をかくのか。わたしの場合をいうと、じつはカードにメモやらかきぬきやらをするのは、全部第二の文脈においてなのである。つまり、わたしにとって「おもしろい」ことがらだけであって、著者にとって「だいじな」ところは、いっさいかかない。なぜかといえば、著者の構成した文脈は、その本そのものであって、すでにそこに現物として存在しているからである。著者の文脈をたどって、かきぬきやらメモやらをつくっていたのでは、けっきょくその本一冊をそっくりカードにうつし
とるようなことになってしまっていて、むだなことである。必要なら、その本をもういっぺんみたらいいではないか。

「わたしの文脈」のほうは、シリメツレツであって、しかも、瞬間的なひらめきである。これは、すかさずキャッチして、しつかり定着しておかなければならない。傍線をひくときに、なにがひらめいたのかを、きわめてかんたんに、欄外に記入しておく。

読書においてだいじなのは、著者の思想を正確に理解するとともに、それによって自分の思想を開発し、育成することなのだ。わたしは、読書というものは、電流の感応現象のようなものだ

おもっている。ひとつのコイルに電流をながすと、もうひとつのほうのコイルに、感応電流という、まったくべつの電流が発生する。両者は、直接にはどこもつながっていないのである。たいせつなのは、はじめにながす電流ではなくて、あとの感応電流のほうなのだ。これをうまくとりだすことによって、モーターははじめて回転しはじめるのである。

読書のたのしみを享受するのもいいが、それはいわば消費的読書である。それに対して、こちらは生産的読書法ということはできないだろうか。あるいは、また、このやりかたなら、読書はひとつの創造的行為となる。著者との関係でいえば、追隨的読書あるいは批判的読書に対して、これは創造的読書とよんではいけないだろうか。

梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書 1969/07、111～4 頁）

（6）自分流をみつける

斎藤さん、大江さん、梅棹さんと、3人の読書の仕方、ノートのとり方を紹介しましたが、皆さんは皆さんなりに、それぞれに見合った読書法を見つけて下さい。

一つだけ注意しておきます。梅棹さんの考え方（傍線部）も有効なのですが、知識・体系として記憶しておかなければならない場合、或いは研究論文を書くために収集した学術論文などの場合は、通読後、傍線を辿って論旨を要約しておいた方が後で役に立ちます。

なお、二つ目の文脈で線を引くのは大変示唆的です。私が2色のマーカーを使うようになったのは勿論ですが、おそらく斎藤孝さんが「主観的に『おもしろい』ところに引いた緑の線」も、梅棹氏の発案をヒントにしたものと思われます。

3 難解な文章に対処する方法

これまで、本の読み方や要約の方法についてお話ししてきましたが、要約しようにもどこが大事なのかさえ理解できないような、難解な書物に出くわすことがあります。趣味の本なら、「縁がなかった」と再会を期す方法も「アリ」でしょうが、論文や思想系の書物などでは、避けて通れない場合があります。そのような時、どう対処すればよいのでしょうか？

難解だと感じる文章にはおおよそ、3つの理由が考えられます。以下、その理由と対処法についてお話ししましょう。

〔1〕レントゲン撮影のすすめ

難解な文章の一つに、「入れ子型」の文章があります。主語述語の中に、さらに多くの主語述語が入っている文章で、構文の見えにくさが特徴です。一例をあげてみましょう。皆さんは何行目まで我慢できますか？

いま僕自身が野間宏の仕事に、喚起力のこもった契機をあたえられつつ考えることは、作家皆が全体小説の企画によってかれの仕事の現場にも明瞭にもちこみうるところの、この現実世界を、その全体において経験しよう、とする態度をとることなしには彼の職業の、外部から与えられたぬるま湯のなかでの特殊性を克服することはできぬであろう、ということにほかならないが、あらためて言うまでもなくそれは、いったん外部からの恩賜的な枠組みが壊れ、いかなる特惠的な条件もなしに、作家が現実生活に鼻をつきつけねばならぬ時のことを考えるまでもなく、本当に作家という職業は、自立しうるものか、を自省する時、すべての作家がみずからに課すべき問いかけであるように思われるのである。

(大江健三郎「職業としての作家」『別冊・経済評論』1971 春季)

おそらく多くの皆さんが、4行目か5行目くらいで諦めたのではないのでしょうか？

これは、典型的な「入れ子型」で、主語・述語の中に長い説明的な文が割り込んだために生じたわかりにくさです。では、例^{ため}しに、構文がわかるように、不要な部分に網掛けをしてみましょう。ゴチックのところだけ、読んでください。

いま僕自身が野間宏の仕事に、喚起力のこもった契機をあたえられつつ考えることは、作家皆が全体小説の企画によってかれの仕事の現場にも明瞭にもちこみうるところの、この現実世界を、その全体において経験しよう、とする態度をとることなしには彼の職業の、外部から与えられたぬるま湯のなかでの特殊性を克服することはできぬであろう、ということにほかならないが、あらためて言うまでもなくそれは、いったん外部からの恩賜的な枠組みが壊れ、いかな

る特恵的な条件もなしに、作家が現実生活に鼻をつきつけねばならぬ時のことを考えるまでもなく、「本当に作家という職業は、自立しうるものか」、を自省する時、すべての作家がみずからに課すべき問いかけであるように思われるのである。

わかりやすいですね。構文を読むとは、こういうことです。別な言い方をすれば、主語・述語だけで文章を読むということです。これは1文ですが、それが1節であろうと、1章であろうと、同じです。1節の中での構造、1章のなかでの構造を常に意識しながら読んでいくことで、難解な文章も読めるようになるでしょう。

余談ですが、「わかりやすい文章を書く」秘訣は、逆に、「入れ子型」の文章を書かないことです。「読みにくいな」と思ったら推敲するときに、入れ子型をはずしましょう。

〔2〕テクニカル・タームの習得

難解な文章の二つめに、「専門用語」「テクニカル・ターム」の使われた文章があります。一例を挙げると、次のような文章です。

私たちは自分では判断や行動の「自律的な主体」であると信じているけれども、実は、その自由や自律性はかなり限定的なものである、という事実を徹底的に掘り下げたことが構造主義という方法の功績なのです。

内田樹『寝ながら学べる構造主義』（文春新書 2002/06、25 頁）

簡単にわかった人は、「構造主義」の何たるかがわかっている人です。逆に、字面は理解できるんだけど、でも、何が言いたいのかはよく分からない、或いは具体例を挙げて説明してみなさいと言われると、できない。そういう人は、「構造主義」というテクニカル・タームに習熟していない人です。

専門的な本になればなるほど、専門用語を理解していないと読めなくなります。専門用語を扱う事典（経済学事典、心理学事典、哲学用語事典など）や、図書館にある専門用語用のオンライン電子辞典などを利用して理解を深めるようにしましょう。『現代用語の基礎知識』や『術語集』『術語集Ⅱ』『高校生のための評論文キーワード100』なども結構役立ちます^{注3)}。

注3)

清水均編『現代用語の基礎知識』（自由国民社 2011/01）

中村雄二郎『術語集』（岩波新書 1984/09）

中村雄二郎『術語集Ⅱ』（岩波新書 1997/05）

中山元『高校生のための評論文キーワード100』（ちくま新書 2005/06）

わからないことを残して進むのは気持ちが悪い、という人のために「構造主義」について、一言解説しておきます。

例えば、日本で「虹を色別に区分しなさい」と言われると、「7色」に区分します。でも、イギリスでは「6色」です。アフリカのショナ語を話す人達は「4色」です。われわれ日本人が虹を見て、何故7つに区分したのかと言えば、それは言葉を通して教えられたからです。これは「虹」に限った問題ではなく、すべての価値観や考え方は「自前の判断」によるものではなく、無意識のうちに言葉を通して教えられた、その国、その土地限定のものなのです。ソシュールは言葉の機能をこのように説明しました。この考え方を敷衍したのが構造主義です。一世を風靡した「フェミニズム批評における言語論」も構造主義から生まれたものです。

【3】スキーマ、そして「読める主体」へ

ところで皆さんは、どうして絵本はあんなに繰り返しが多いのかわかりますか？ そして、あんなに繰り返しが多いのに、どうして子どもは飽きないのでしょうか？

人は、映画を見たり、本を読んだりするときに、その内容に最もふさわしい枠組み（フレーム）を準備して理解していくといいます。言わば、本の扉を開けるときに、その扉の鍵にふさわしいスペアキーを準備するようなものですね。スペアキーはいろんなものがあって、それが多ければ多いほど様々な読み物に対応できる、つまり理解力が高まるという訳です。このスペアキー、枠組みにあたるものをスキーマといいます。

小さな子どもが絵本の繰り返しに飽きないのは、まだこの「物語スキーマ」が形成されてない、別の言い方をすれば、パターン化が読めないからだと考えられています。

大人の場合も同じです。様々な種類の本を読めば読むほどに、読解力は向上していきます。

一方、同じ本であっても、繰り返し読むことで、理解力は上がります。

日常的な経験からも分かるとおり、私たちは決して確固とした定見をもった人間としてテキストを読み進んでいるわけではありません。むしろ、テキストのほうが私たちを「そのテキストを読むことができる主体」へと形成してゆくのです。（略）

例えば、非常にインパクトの強い本の場合、最後まで読み終えたあと、そのまま間をおかずにもう一度はじめから読み直すことがあ

ります。そして、その二度目に、私たちは一度目には気づかずに読み飛ばしていた「意味」を発見することがあります。なぜ、最初は見落としたこの「意味」を私は発見できるようになったのでしょうか。それは、その本を一度最後まで読んだせいで、私のものの見方に微妙な変化が生じたからです。つまり、その本から新しい「意味」を読み出すことのできる「読める主体」へと私を形成したのは、テキストを読む経験そのものだったのです。

(内田樹『前掲書』125～6頁) 注4)

注4)

内田樹『寝ながら学べる構造主義』(文春新書2002/06)

4 読み方の「最終到達目標」

最後に、読み方の「最終到達目標」として、「クリティカル・リーディング」と「萃点(すいてん)」とをあげておきます。前者は学術的な書物を読むときの理想的な読書法であり、後者はそれ以外の読書法における目標点です。

〔1〕クリティカル・リーディング

クリティカル・リーディングとは「批判的な読書法」のことですが、これは単に批判することが目的ではなく、書かれた内容が「本当に正しいかどうか」、自分なりに再検証したあとでそれを受け入れたり、逆に異議を唱えたりすることができるような読み方をすることです。

皆さんも「たけしのTVタックル」や「日曜討論」など、テレビやラジオによる「討論会」を一度ならず見たことがあると思います。その時に、ある人が気の利いた意見を言うと、「そうだ、そうだ」パチパチパチと手を叩き、すかさず次の人が反論をすると、「オー、そうか。そうか、その通り」と手を叩く、といった節操のない経験をしたことはありませんか？ 無批判に相手の意見を受け入れると、自分の意見を持つことはできません。できるのは、「どちらがよいか」というジャッジだけです。論文が書けないという人は往々にしてこうした失敗をする人です。

例えば、「世論調査によれば日本の国民の7割が死刑制度に賛成しています」という意見があったとします。これをそのまま受け入れたのでは、反論の余地はありませんね。しかし、その示された「世論調査」(2次データ)を原典(1次データ)まで遡ったらどうでしょう？ 「調査の対象はわずか20人だった」、「調査の対象には小中学生が多く含まれていた」、「女性ばかりが対象だった」、「調査は3回行われたが、いずれも凶

悪事件が起こった直後だった」等々いろいろな問題がでてくるかもしれません。可能な限り、著者の示した資料を原典に遡って検証すること、これが論文を生み出す原動力となるのです。これをテキスト・クリティークといいます。

「テキスト」を生み出していくあらゆる状況、例えば、それを取り巻く時代の環境であったり、作者の生い立ちであったり、表現手法であったり、そうした様々なものを「コンテキスト」といいますが、それと「テキスト」との関係性を丹念に把握しながら検証していくこと（テキスト・クリティーク）、これがクリティカル・リーディングの基本です。

【2】萃点（すいてん）

大江健三郎さんは若い人達に系統的な読書をして欲しいといっています。それは、ある本を読んで面白かったならば、その人の著作を系統的に読んでいくということも含まれるのですが、それだけではなく、その著作の中にでてくる書や、テーマなどにも手を伸ばすことです。氏自身、その一冊から「自然につながる本を見つけて読んでいくこと」を繰り返してきたと言います。そういう読み方を「脈絡」という語で表現しています。

脈絡がくり返し戻っていく場所がある。「鶴見和子さんが書かれた『南方熊楠・郵戯の思想』という本に出てくる言葉です。脈絡が重なりいちばん色濃くなっている場所がぼくの『萃点』です」。

「読むワザ」（2010/1/1『朝日新聞』第4部）

脈絡に沿って読書を進めていくと、同じところに戻ってくることが何度かあるといえます。そして、その萃点を基地として本を読んできたとわかったのは60歳を過ぎてからだと言います。渡辺一夫、サルトルや加藤周一、サイードなどが、大江氏の萃点であるといいますが、皆さんが萃点に到達するのはいつのことでしょうか。

【3】バランスの良い食事を

先日、若い人に人気の森見登美彦さんが読書を食に譬えている記事に出会いました。秘訣はバランスの良い食事（読書）ということでしょうか。

文章にもまた味があると思うようになった。みずみずしいサラダのような文章もあれば、鰻の蒲焼きみたいにコッテリして滋養のありそうな文章もある。しっとりとした湿り気のある文章もあれば、さらりと乾いた文章がある。スルメのように噛めば噛むほど味が惨み出してくる文章もあり、良く冷えた麦酒のように喉ごしで味わうのが良い文章もある。(略)

いくら滋養があるといっても、毎日鰻丼ばかり食べるわけにはいかない。胃が弱っているなら軽いものを食べたい。いくら味が良いと言っても、スルメをしゃぶっているだけではエネルギーが湧かない。

もし料理をおいしく食べたいのであれば、いろいろな工夫をする。飽きないようにバランス良く組み合わせるし、自分の身体の具合や周囲の状況を考えて今おいしく食べられるものを選ぶ。

森見登美彦「作家の口福」(『朝日新聞』2011/05/28)

“読書力”をつけるには、
「文庫 100 冊・新書 50
冊」の読破をめざそう！



2色ボールペンを使って、要約と「ほう」に線を引く
といいのね



難解な文章は、主語・
述語を読む、専門用語
を理解する、繰り返し
読むことなんだ！



理想的な読書法は、テキストを生み出
していく状況(コンテキスト)をつか
みながら読む、「脈絡」に沿って読む、
さまざまな文章を読むことなんだ！

